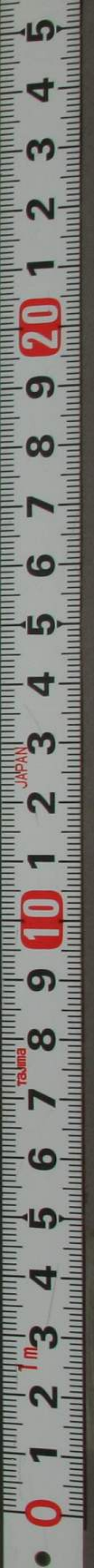




繪本拾遺信長記 九

3564
22



門 13
 號 3564
 卷 22



館本拾遺信長記後篇卷之九

目録

長秀の美路を本林幸

且羽長秀隈くそ勢揃入

踏智の森幸又勢揃

踏智森合戦之幸

小田勢踏智の森又押寄る

踏智乃森合戦拾本孫六勇力

信長記後篇卷之九

早稲田 大學 図書館
 昭 34.6.3 燹
 藏 書

駿河守手解圍故交之幸

小田方不吉の兆

上人御書教に御悔乞

小田勢強勃

孫六踊り子

上人遠慮之幸

先考が後若年親守に御

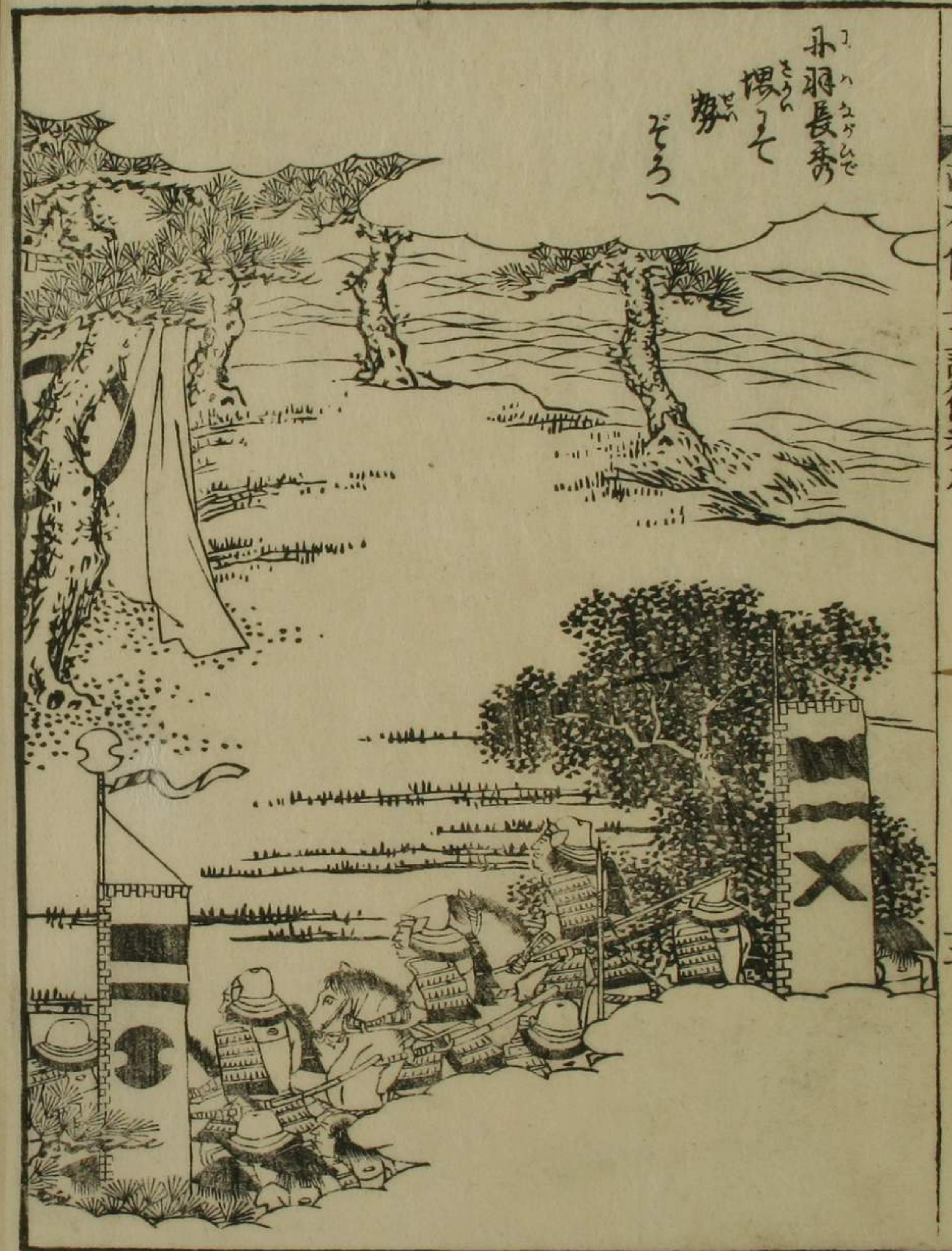
繪本拾遺信長記後篇卷之九

長考の幸と駿河守

去る小堀表より宿陣せしに國渡海に軍お舟將又即左衛門
尉長考の天正十年六月朔日俄と勢揃をばし軍と押出たの
情しあつたに近郷近左の門後多不審の事と思ひに國渡海
の軍兵多此不と勢揃成るは若や駿河の森へ押させ上人と
討きしんこの謀はあざむやとあやしく思ひに近郷近左の
けさ成没進はしるしに如上人家老多集め叔の明智
が中紙なる勢多懐くてもさるや何より何と先其用をたぐり居
るの事出来せんとも乗る難きの珍本孫市志摩とに即ち
とどめし近郷の門後をばしせらる此御考とせし勢多珍本



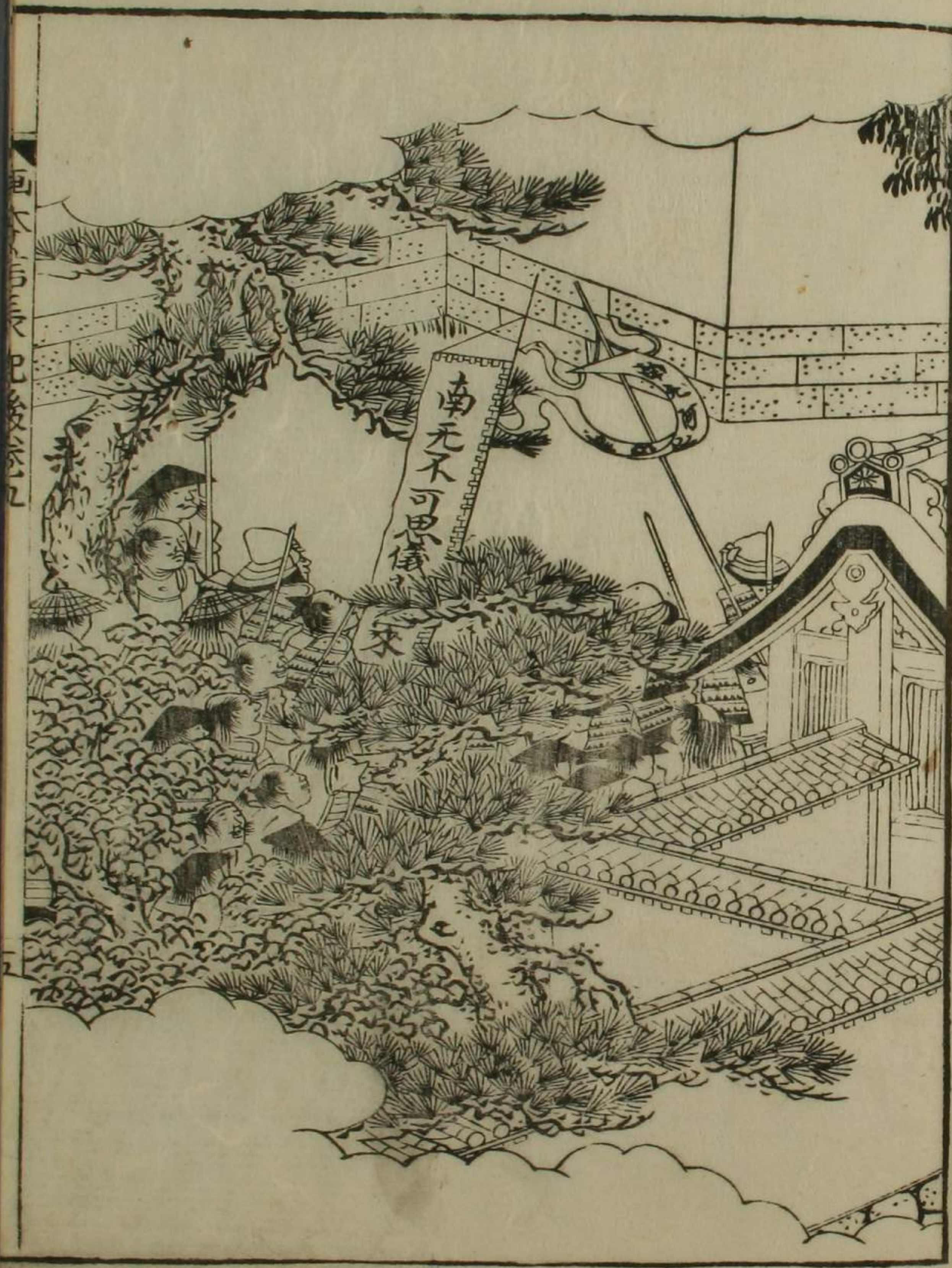
丹羽長秀
 櫻子七
 ぞろへ



志摩の云よと及びは安徳の門後我もしくと馳あつたり又
百余人を本願寺と堅めたり聖化が六月二日丹羽又即左門
長秀の三子余人塚をきて紀伊國に押しせ駿の森より十丁斗
水の方より陣をえく威風と志出し其勢を二子より一
子に大ぬ丹羽又即左門溝口伯耆守吉山伊賀守戸田武
元守坂井と右衛門守一又又百人又一子に長秀が腹心の良
等には三郎左衛門坂口左衛門村上周防守尾後喜兵衛等一又
又百人左衛門より日附又素討人と其用多しは本願寺の
と家老下間乃一族とそとめ坊主衆は塚の美宗寺河内
の専光寺松州小湊の専光寺日圓三番の定光坊本専寺武
志は難波の珍本一統孫市を人志摩に即家門の渡況は

時なりと老る若死のきらひさく近近村の門後百性我
もしくと馳集り一命とらげうら防ぎせんといふや一面
乃お終は今日又移りぬとは信長を恨み上人を悼み歎き悲
まはるるあはし上人も今これまでと扱し百さし多し本堂
所若君其外の洲一族も各洲生害あぶること洲光悟て門後
の士卒と下知し終ふぞありれよもいたはしうま一攻丹之備
丹羽が軍勢三子余人潮のどく押弄り洲堂のめぐりを十重
かをよえかこく岡をど門とらげうりし今や本願寺粉のこ
ろもあつんと兼て美悟の門後の道信皆一日よ智をくらうら
月と一度又流るる叫喚地獄のありさましかくやとむりか
はし下間頼藤教をらげはし懐きたるや素よ祖師聖人

西之介上言後集



藤の森 年々 繁茂

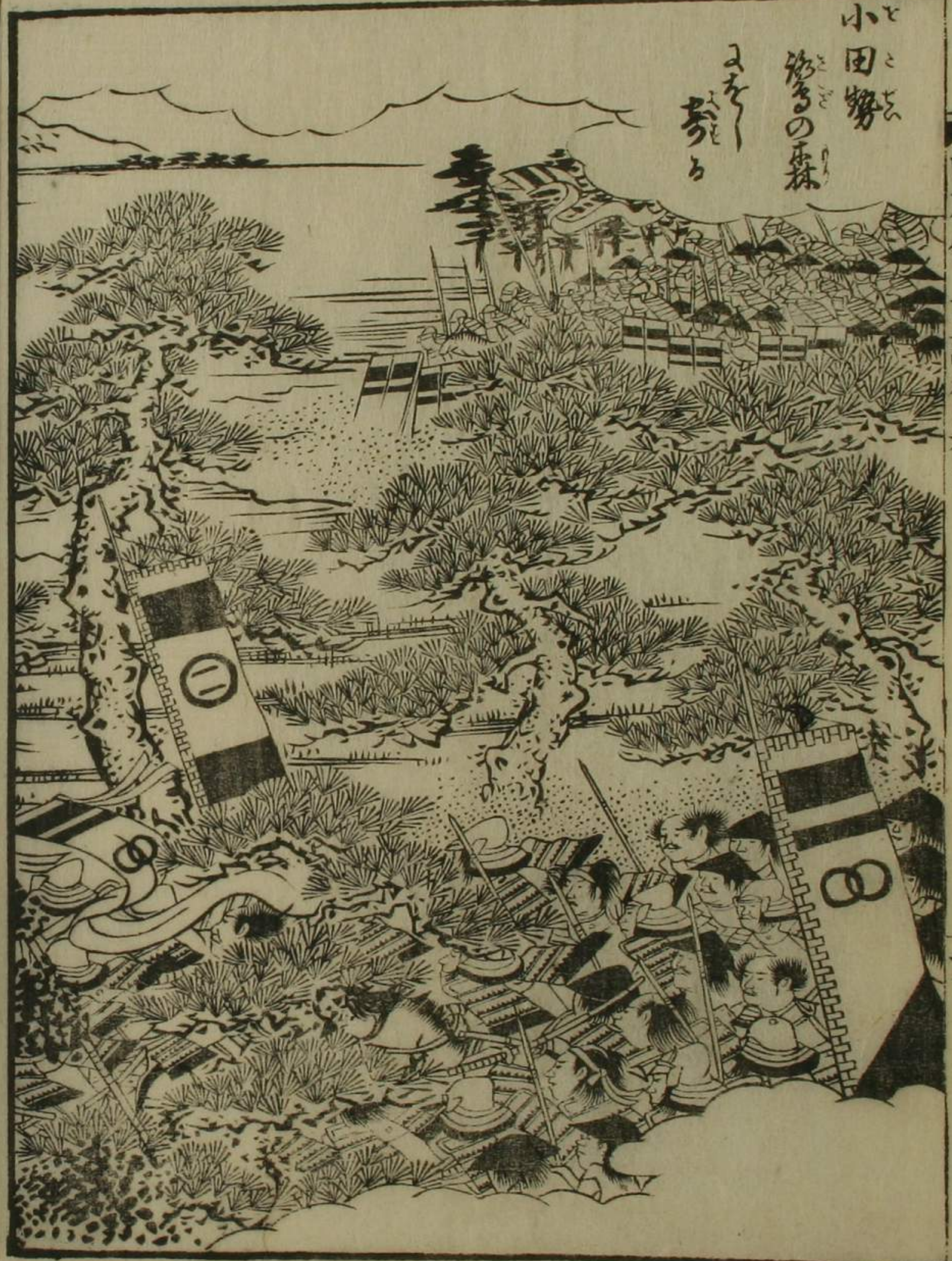
の洪巻を思つて命うぎり此法敵を防ぎ叶ぬ隙に打死せ
 よ其耐こそ日暮急じなる西方弥陀佛光明を放つてむた
 まい利刃を振り此佛敵小田信長を極楽浄土より責殺ん
 何の子細うあらんきぞやいさあやと下知とれが難攻の門
 後鈴本の一統よくこそ諭し給ふのう未未の先陣はと
 とお口をかへら鉄炮をいしくと押さる人得りの引さげ待居
 うりけるげよこそいん人よたり耐よ丹羽が先口は軍勢
 らうくと押させ鉄炮を打ちけ火矢を放ら皆耐よ奈落ん
 とのこまぐる門内より此石破破らさるは上人の御生害
 あべ防げやせげと怒くよ吹り門く重なる鉄炮の音
 されを採らんぐよ打出せと目よひまる敵の大勢鐵の門後力
 法うは防ぎ難くをいん人よりたり

野の森合戦の事

寺内の軍兵ふせたりて人々が鈴本孫市日老人日孫六新
 ていんじと務くを勢引合しと熱門を推しき稀麻のでく
 んまきころ敵の中へと門と噴ひく突てい摩利支天の荒る
 めさまよ前後左右斬立突立今日とわさうの死ぐるいと雲浪
 をあげて戦ひい冷りし勇勢あり寄子の軍兵を敵
 と侮り石山は似ざる要害はしと寺内よ百姓の門後が
 集りたさばとく何よりを仕出んべき只一りよ美崩さん
 思ひの外鈴本一統が極勇信心堅固の働き死と思ひざる鋒先
 切まきまき母い死人頗多く思ひ軍隊突死し一所たり引



小田勢
松林の森
又そ
あそ



うろろ後陣の考ふこれを見く先かど乃小勢又突崩さぬ
やうやあつんぐはしきろつまひる引る者どもとらうれとら
せども引まらる軍勢の解るれいよく強をきてまらる小
ぞ鈴本孫六得たりしこあまたまはしとちかま向よはしうど
あつらふ率切らせ難らせ強由門と戦ひつら又壽多の中より
誰ともあつらひおれ強炮線六右の脚よりつり居居に
と例しうば敵兵これを討んとぞうくとまあつら石を線六片
足まらせちかろりまはし近付敵と防ぎたれと既又危く見え
うろろつら鈴本孫市をろろ小つくとつらぐれは宙を飛んで
近來りまらうとつら敵兵と口方へむ門と退散し終又線六を
殺ひ出し肩よめて退きまらる壽多の軍兵これと見く追討

せよとのまらうろろ瓜大お母羽長考これを制し日も西山う
わらうげは夜軍せんも喰らきつかり明朝一日は押考一息ま
系えんと軍勢をまらる本陣へ引まらる本守のあつらり
門後乃めんく今日討死の討たりと兼く是昭てあり
これと敵退しとつらとんきやうとつら今宵も安婆の逼り
らうとつらおに打ち明日こそ心よく討死しつらよての沖中
そくに遠いらく後楽海去り強く返し名おひこすい限り
とつらり合々守り居る小夜守つらつら後考の陣をかん中り
つら小信者ら軍勢をせ加りしとつらと炬火冊火の光り天
まつらぬきつらくの旗は物夜虎よ吹らびき寺の口方ま
敵兵つらぬ限りらくおびくともまらる方は門後考先で



踏乃森
合戦
鈴木源六
勇力



見てあるけしうの軍兵や明日の軍勢を以て一日は素
 うはす射もせせだまへんゆえ末はいとや軍のたじまふ
 きふ美期の急備あると寺中一日は稱名の教を唱は
 於如上人と沖連枝家老等々悉くし集めらるる祖師の美
 教を本堂の西に居させ給ひ沖流せられたるを給ひ末世
 湯丸の耐節是悲はしとはいふも祖師聖人たふしけ宗
 門を弘通はししてより教百年の今もより化養と蒙る門
 徒信心堅固と夫れぞとえうは流し今此妨難あり宗門忽
 断滅の及ぶゆへ嘆本末たうも禁し給ふらん是今も我不
 徳のついで不之と志教の向くともめくともきまされ給ひしう
 一層の人これを見たりある悪の信長やう教をきき若知

徹を此際まぐ若くも集うともるの勿体なやと面慶
 流るしむやみく上人宮の中より明日のとうり教軍
 勢は強し強て防ぎ敵をなぐは死期は終んで罷倒りて何
 せん多し門内又出入りが皆我ともろともよま生宮とんき
 堂は火をくけ焼と門は開きし門徒も皆日終りてこれの
 とはなるべいと門徒は生か得る一日終らる人き教の
 とく沖くまけえとせと門徒の庵中へ場里がしが是れ今世
 の沖脇乞難の頂戴せよと西へ沖流は流しはてきたるが胸
 までさら入得一日はまうと流るる開の教よりとてはし
 里をりたる次次なり

信長の本陣寄るに解圍被る事



小田方
の
北

画本信長討後卷九

明は六月三日まご志のゆのあけをうれざる小考の六軍一
 日よをよせ其勢ひの恰も大山をほんぞれた滄海にほんぞれたあり
 さますあまの同考小周をこ門とあけつる今や中教寺の團長一掃
 又美崩さんどろろをなかり門後のせんくといや今こそ我こそ
 往生の附なりぞ此後死せんより一働き戦ふとそれと去る
 討死せよと叫ぶく得物引上げ斥咄と吾で扱へり小將が
 軍兵何の舎敷より及びに緩兵急よ系入とやと態を長柄を
 引上げく峰際へいさくといけよるあに中教寺の團長
 て周を焼く建屋一しりあまの陣よと押りいそ其雲中
 南玄妙法蓮華經の七多分書る信長が大旗ひらめけて
 けんくが寸限くよまきて小將が馬の若に海よりあは

これをわんく款も味方りもなまあへる石思儀やいさく
 懐美の仕業とやと互方とも勇気たゆむ皆討の時と後
 多り此討死如上人の御次男阿茶内若所御膝元と付せ給ひ
 御連枝二石に御生を告あせらまんと既念佛も終せぬ
 市門後いさくや見申り終へいさくしりうらん寄りの軍勢
 率よのこをまきたり後陣より引退くありさますは
 上人をさるめあまの門後の乱中あま心得の款の結構る
 これわんくも美はし必勝の合戦よりうらむはして引給く
 こそあまのしん味方の人くを扱ひき出さん御多とやと
 石にありて見たる中よ忽考あ熱軍を崩して旗をさま
 戦を倒し右討死はれは花村よりびき給のどくあて上方に

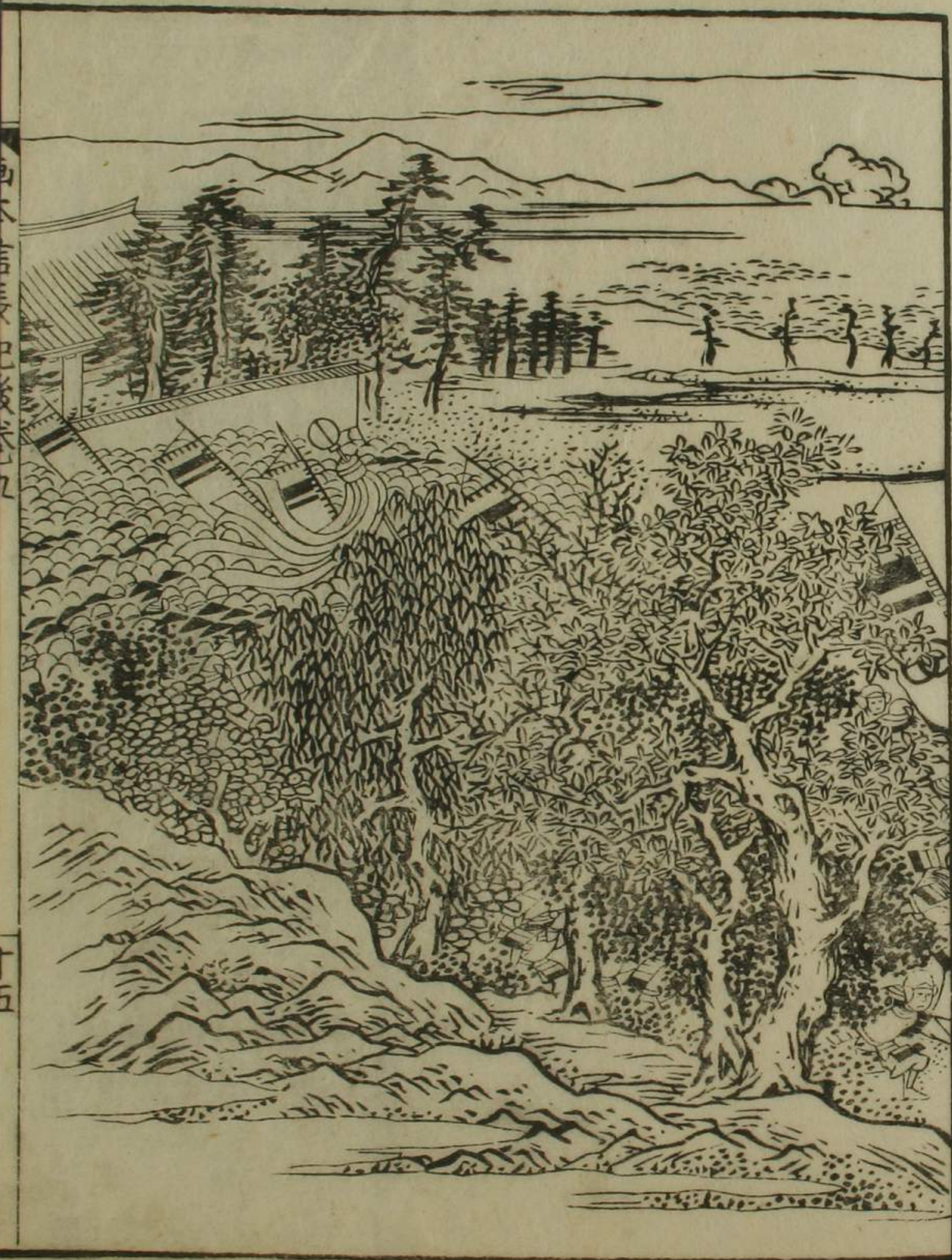


上人
所
御
乞

日本信長記後卷九

て彼まゝとぞ不恩謙とらふに申さるるり寺中ニ發せしん
 何れよの強勅しつ引えやとえく論どあひまづめくの
 ありたるをに近郷の門後の男女こけのけいれをせまうきの
 二日朝法教信長京都本徳寺ニ棲居せしが長門明智日向守光
 秀係教を起し不意に押しよせ信長を討えついで二条の城を
 冊之息男燃之女信忠を妻殺し洛中洛外既之入丸之及ひは
 今あきの陣中へ此ののぼりあててこそ無らばよめて引え
 と若うりたる小上人をそごめ御連枝家老門後の人こそれに燃
 ちてあつてあつらうらやま退討して討苗と血氣の若若造是出
 て追くまはるくの門後の百姓を皆焼くくふに竹槍持
 鎌或の柳柳うんごんをたたく引引教瓜んぐくは安泰と信長

が愛死し發したるを多の強を消しつ小田の満軍勢誰一人
 しあせそく戦んとつ若方く去民を竹槍に命をまゐり或
 討る若あり七烈に陣は八載ニ難例されはをもえたりて
 引を長秀中しし釋人と制とれと身より更に入まはれ
 鐘でまゐりたる小長秀と詮方かくともはれまゝ追く堰の津へ
 引えたる見若しうりたるありとまかりとむが小中教寺の浄堂
 うは思ひ彼けざるあきの退教とらひ殊は信長明智とて
 其の道しとあへくわく小池之勝飛の厚本よあひ優曇華の死
 咲心地して是又法教の根の根より當小門に押しく更別案の
 なるはは是偏ニ跡院の利観の光秀がふは佛と佛教と殊
 はし強者方とぞやあつらうは「やあつらう」やとまのの表とて



小田の勢 勃

て勢ひ勇むぢやくの周のまをうぢぢいけし終本孫六のさの人の合戦
 の流丸は斤兵をすぬくと歩ゆらうぢぢが信長討ちまうの天
 軍崩とまて別法とすまうよりたもうのうはしと痛みの若悩と
 お志を獲着るうぢぢ本堂へ斤兵あやとと紅妻りとの人の所を
 出て日の丸を画し軍扇をさ門と用きあうめでとやう法款
 のむいきて京門いよく末廣がりの所を畠と推して御い
 つ足をもぢぢり舞うる小所連枝家老門後の男女いやくと
 涙るぢぢめでとうりたるたけしかりうそれか今又驚の森所堂と
 ぢぢいと膝蹴踊と居し紙の具兵を居しらんむの恙知して躍り
 此右例よりとやまに明智が深教今や日通うりせい上人所
 笑みい所生害らうせとと祖師聖人の所を教と一時の煙と焼

まの一向宗門御終にぬぶるたよ其後をのやまうは長下のま
 と命と落しるも孫院精世の悲教より名もまは推し是と
 仰がざらん何人うこれをまのいざらんはうく信長云の所あり
 とまを考ふる小勇猛膽畧をんう獨歩し居居の家に生きて僅
 と教奉の同は日本中園を切まうと天下の武おと孫と三
 後の右ち居は昇進しに海の権柄を崇手は梅りゆらうの流丸未
 曾のの優傑あれどもまよ統く執教まう終の怒りよ流丸の
 ろるまひかうりは靈場を焼傍瓜殺し本教寺とせまりて佛返
 の上人を害し京門を御滅せしんと計りまうのころは此節
 天下を襲ふの靈山を御山をも妻崩さんと軍馬とにむけ法佛
 諸天の怒りよふと明智先秀が殺逆よ命と落し終るいまじ



源六
踊子



なぐり信長云の自業自得積悪の報ふなりてなまらざるべき
因果の如く不之且今朝露の森とせよの陣とよ思雲如の
南無妙法蓮華經の旗を引きたる為とせし先よ若くはの合
戦は腰矢出く信長云の御旗爪奪ひつぐともうく矢さりし
を今長秀が陣中へ落して信長云の復死を告し諸佛諸天
の悪も強ふのともうしは鬼神妖魔も信長の悪逆を憐れり
る青腰のあつろりやと刃の毛もよごらて思し

上人遠慮多事

六月に日明智日向守光秀警の森の御堂へ使者と送り
て中降しつろい信長悪逆日くは増長し本願寺を本山と
妻云さんとい其まをうに海もとも困むるのともうしは却つて

我を教さんとい先秀の姑小田家に降させると人ども其の
自後よりつら信長の期波家の陪臣我の清和の流きたる
公波の後孫足利家の家人なり我天下と再貞せんと欲し
く云方義昭云を信長よとらめともよ計て足利を祀さん
とい去る小信長云方を廢し自ら天下の政とと執事の
我門の渠が奸計と臨り一度の政順とともい今
足利家(忠濃と通)信長を討て西國よ押しすは義昭
云を京都よ向再び云方と仰ぎなるとい希い上人諸
國の門下へめぐりし文を下し門徒の輩をうて先秀が下知
降りしめ給らざる方への忠義行りし先よ賜らんをせし
今度本願寺の危きり宗門断絶せんともうする事よ思



直木作長言行卷大

五八

花のこ目し火より其しうらしを先秀が信長を討し後
 て今本教寺の安統うらうの春山のてし上人此石瓦感のう
 ばとよやく小領堂ありて又畿内及び近江俾勢の門下へ
 ありく知瓜下し移ひ先秀よ力を添へ小田の強堂とに
 いやく法款の根を断絶せんこそ万令の計を成すべし
 就中中國毛利家に入寇し義服を乞上洛の計しやなり是利
 家再真の助かりしが秀成て遠背のあぶらうはすししく俾
 ありて然るべし先秀よ力を合せ移ひあるべし本教寺こそ
 かく加賀城を能く俾勢近江を寄附し松州石山よ本寺
 再建せしめまんし宗門繁昌の計也し何ぞ助勢の義偏
 又頼もねえと言瓜巧ありてや送りたる小上人はし石瓦を

河津系も小何きと言瓜搦へ今度宗門破滅し上人河津も
 既し河津安統のあぶきのおの先秀が力より佛款信長とそし
 出寺安統方々のを得たるは其に先秀のい出寺よ於て宗門
 再真の大權威とやべきうされ此度の頼も抑ひての領堂ありて
 ちうるべきうとやうらる上人既をうせ移ひ先秀が信長と討
 い出寺の急難を救んとあはけりしは已が眼とそらんとて互若
 と仰し信長を殺しおと率はして出寺よ懸瓜うけりや
 系とくくを理よあさうはたし先秀の出寺のあ小信長と頼
 うりとも先秀のあ抑ひく頼達の飛のうらあぶらうはとよく
 困りより小田家藩代の長下馳登て先秀を乞ひりちうらな
 むし我情のあしして送居よ一味し門徒よ知し悪と助けしと

云々宗右の振種も祖への不孝此上のあふさまや此僧候より降す
 ども即先秀が俊若(善治)の御代にや頼(頼)り常々(常々)むよ此度我
 らも及び門後一統の御代にまよふ御命(御命)にこそ宗(宗)候是(是)よ
 此(此)以後(以後)て諸國の門後(門後)へ下知(下知)の義子(義子)速(速)福(福)をりは(は)れども(は)れども救(救)美(美)の
 防(防)我(我)又門後(門後)名(名)遠(遠)愛(愛)の輩(輩)お(お)さ(さ)ら(ら)じ(じ)に(に)は(は)二(二)應(應)役(役)人(人)を(を)在(在)て(て)實(實)情(情)を
 相(相)札(札)而(而)して後(後)御(御)下(下)知(知)ま(ま)陸(陸)の(の)中(中)に(に)や(や)後(後)に(に)は(は)る(る)憎(憎)む(む)難(難)難(難)に(に)
 る(る)べ(べ)し(し)と返(返)答(答)て(て)俊(俊)若(若)と(と)う(う)を(を)殺(殺)し(し)り(り)上(上)人(人)の(の)智(智)慮(慮)凡(凡)人(人)の(の)及
 ぶ(ぶ)不(不)に(に)お(お)ら(ら)じ(じ)と後(後)よ(よ)ぞ(ぞ)人(人)々(々)感(感)づ(づ)る(る)

繪本拾遺信長記後篇卷之九終

